

保育所保育指針に基づく 質の高い保育を提供する

～豊かな心を育てる保育のあり方～



社会福祉法人 愛護会

金ヶ崎保育園

保育士 松戸 佑美

1. 研究主題

保育所保育指針に基づき質の高い保育を提供する
～豊かな心を育てる保育のあり方～

2. 主題設定の理由

本テーマをすすめるにあたり、保育課程に基づき創意工夫のもと一人ひとりの育ちに応じた計画、実践、反省、評価、改善されることで保育実践の充実と保育所の社会的責任を果たすことが保育所保育指針は求めている。私が受け持った5歳児32名のクラスは68パーセントが核家族世帯であり、同居していても二世帯住宅であったり、保育園のお迎えに祖父母の姿がみられないなど、家庭環境に変化が見られる。そのため、異年齢児やお年寄りとの関わりの中で、小さい子に対し優しく接することができなかつたり、お年寄りから手を差し出されても無言で後ずさりしてしまう、散歩の途中で会った地域の方に話しかけられても言葉を返せない等と、どう接していいのかわからずに戸惑う姿、自分中心でまわりの人たちの事を考えられず行動する姿がみられた。

新保育所保育指針の保育内容

イ、人間関係

他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う

(ア)ねらい

保育所生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。

身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感を持つ

社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける

(イ)内容

高齢者を始め地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ

と記されている。様々な人との関わり感動体験の中で豊かな心(優しさ、思いやり)を育てるために異年齢児や地域の方との交流を図り、保育の質の向上を目指しながら、保育課程に基づき一人ひとりの育ちに応じたきめ細やかな保育を展開していきたいと考えこのテーマを設定した。

3. 研究のねらい

地域の実態、子どもや家庭の状況、保育時間などを考慮し、子どもの育ちに関する長期的見通しをもって保育課程を柔軟に編成する事が必要であり、地域の様々な人との関わりを通して豊かな心を育てる保育を目指す。

4. 研究の仮説

さまざまな地域との関わりの中で保育の活動を展開することにより、子ども達に思いやりや優しさの気持ちが育つのではないか。

職員が小さな事へ気付く力を高める手段として、積極的に地域に出向き、沢山の出会いの中、得た知識を保育に活かすことにより、子どもたちに人と関わる力が育つのではないか。

5. 研究の内容

子どもと様々な人との関わりが深まるような保育の展開をしていく
保育の質の向上に向けて、職員がまず、積極的に地域に出向き、新たな地域との関わりがもてるようにしていく
今まで取り組んできた地域交流を大切に、よりつながりが深められるようにしていく

6. 研究実践

実践

地域の方や異年齢児との関わりを通して

立花先生は ものしり博士だね <自然観察>

金ヶ崎保育園は、たくさんの自然に恵まれた環境にある。園庭では草花や、藤づるであそんだり、散歩にでかけると様々な発見をしながらあそんでいる。そこで、平成 15 年から毎年、“もっと自然に親しみ、体を丈夫に”という思いから年長児に対し様々な話をしていただいている立花先生は、日本野鳥の会北上支部員であり、元小学校教師・民生委員や小学校のスクールガード等を受け積極的に地域に貢献されている方である。子ども達は4歳児の時から立花先生の話を楽しむにしていた。5月の愛鳥週間の時期には、実際歩きながら目でみて、耳で感じながら体験する鳥の観察会を行っている。

4月 - 春の自然やちょうちょについての話を聞く。子ども達は話が聞けるという事で嬉しさのあまり、落ち着かず先生の近くに寄り、質問の時にも自分勝手な話をしてしまう。立花先生からも「今年は元気のいい年長さんだ」との話があった。様々な体験を通して話をきちんと聞けるように、また、自分の考えた事を人前で話せるようにするためにどのようにしたらよいか保育者間での話合いを持ち、きちんと話が聞けるように絵カードなどを使用し保育者の話し方の工夫を行った。子ども達が今日1番楽しかった事等、自分の気持ちを言葉で伝える時間を設けた。毎日の繰り返しの中で少しずつでも出来るようになればと願いを込めながら進めた。

5月 今回は、岩手県立千貫石森林公園に出かけ鳥の観察会を行った。事前に立花先生が描いた様々な鳥の絵カードを持ってきて、鳥の特徴や、鳴き声等の説明を行っていたので期待を膨らませる子ども達の姿がみられた。当日は鳥と草花の手作りカードを持ち散策中に見つけたものにマルをしながら楽しんで行う事が出来た。自然について学べる施設、森の学び舎も見学した。

子ども達は自分の興味のある事や不思議に思った事を言葉で伝えようとする姿がみられるようになった。

その後、散歩中に鳥を見つけて「あっ立花先生が教えてくれたアオサギだ！」と話したり、「 が家族の鳥の先生になり楽しい時間を過ごす事ができた」と家庭での様子を書いた嬉しいおたよりをいただくようになった。秋頃には、きちんと話を聞き質問もできるようになり、立花先生からも「話を上手に聞けるようになってきている。立派なさくらさんだ」との言葉もいただいた。立花先生は、その季節に応じた手作り教材を使用しながら話し、その内容は子ども達の興味を深める事ばかりであった。卒園した子ども達から話しかけられ、「嬉しかった」「自分が元気なうちは続けていきたい」と話している。

考察

- ・どの内容も専門的知識がないと出来ない事ばかりで、地域の方の力、「地域力」を感じた。子どもたちはもちろんであるが職員も大変楽しみにしており、体験を通し発見した事を保育の中に活かす事の大切さを学ぶ事ができた。
- ・自然観察や話を聞く機会を通して、話す・聞く力が伸びているのを感じた。座って話を聞けなかった子が目をみてしっかり聞けるようになり、自分の思いをなかなか言葉にできなかった子が自分の疑問に思った事等を言葉で伝えようとする姿が見られ子ども達が育っているのがわかった。このように、私達保育士だけではできない事を地域の方の力を借り、たくさんの活動の中で活かす事ができた。
- ・立花先生が新聞や、専門誌などに、年長組との取り組みについて投稿しているため情報発信の良い機会となった。

今日は何のお話かな <昔話>

4月から子ども達の話す、聞くという取り組みが上手くいかず、園長に相談したところ 及川重美さん(08年度金ケ崎町伝統技芸達位)による“昔話を聞く会”をしてみてもどうかという提案があり、月に1回行った。重美さんは、数年前から 小正月行事やお店やごっこの行事の時に昔話をさせていただいている。幅広いレパートリーをもっており、毎回「何のお話かな」と楽しみにしている。和室を使ったり雰囲気を変えながら行い、11月には、伝統的健造物群大松沢家で、とても良い雰囲気の中、話を聞く事が出来た。重美さんは、昔話だけでなく タニシや青虫・ハチの巣など、虫が大好きな子ども達が興味を示すものを持ってきて、見せてくれた。

「友だちとのトラブルが多いT男」

まわりが見えず、トラブルが起こる度、仲立ちに入ったりT男と1対1での話し合いをしていくようにした。T男は絵本や紙芝居のお話は好きで集中して見ることが出来る。また、1人で絵本を読む事も出来る。昔話しの1回目、重美さん

の話を聞けるので嬉しい気持ちで落ち着かない姿も見られた。話を聞く際は保育者の近くで落ち着いて聞けるような配慮をし、2回目の“昔話を聞く会”を終えた後、どのような内容だったか話していると、詳しくしっかり覚えていたのはT男であった。保育者もその事に驚き、T男の話を聞く、話すという得意分野をもっと伸ばしていきたいと考えた。その後自信をつけたT男は、色々な発表の場でしっかりと話が出来るようになった。また、クラスの子どもたちもT男を信頼する姿がみられるようになった。友だちとの関わりも良くなり、トラブルも減ってきた。

考察

- ・最初の頃に比べ子ども達の話を聞く力が身につけているのが良く分かった。
- ・“聞く、話す”事を目的として始め、クラス全体としての成長も見られたが、T男の意欲につながる良い機会となった。
- ・また、子ども達が興味をもっている物を見せてくれる中で重美さんとの関係が深くなり、地域の方の力を借りながら成長を感じることができた。
- ・地域にまつわる話など、いろいろな話を聞くことができ、良い学びの機会になった。

運動会 9月

年長児が自然や地域の方との交流の中での経験を小さい子たちにも教えてあげたいという思いから、7月のお泊り保育の活動では“虫についての発表”と“ふれあい運動会”をおこなった。小さい子達に喜んでもらい、自信をつけた子ども達から、また小さい子に何かしてあげたいとの事で、虫のゲーム屋さんを行う。秋の大運動会はたくさんの虫との出会いから『ニコニコのはらのうんどうかい』というテーマで行い、競技の中にはニコニコ野原をイメージした虫がたくさんでてきた。

各クラス、虫のお面をかぶり入場する。特に5歳児は今まで以上に異年齢児や、地域の人との交流を持つ競技を取り入れた。地域の方との交流から取り入れた競技は3歳児が地域の人にタケノコをもらったこと、4歳児がひょうたん作りを経験したこと、5歳児は、消防署の新庁舎落成式で「子ども鹿踊り」を披露した時に消防士に憧れを持った事から、ニコニコ野原の消防隊という競技を行った。親子競技では、ジャガイモを友愛園のおじいちゃん、おばあちゃんに届けた事、合宿でカレーライスを作ったことから、親子で虫のお面をつけカレーライスを運ぶ競技を取り入れた。

「自己中心的なS男」

運動会練習の中でも負けると悔しがり途中でやめてしまうなどの姿がみられた。その都度、気持ちを受け止め話をしていくようにするが立ち直るまでに時間もかかる。開会式の練習で1歳児の子と入場する時に、最初はなかなか手をつなごうとしなかったが、保育者も一緒に手をつなぐと照れたようにしながらもお互い笑

顔であった。練習を繰り返していくうちに、一生懸命お世話をしたり、顔を見合わせて話をするようになり、成長が見られた。また、S男の姿を見ていた他の子供達が喜び「先生、S男ちゃんすごいよ。ちゃんとやってたよ」と皆で認める声が聞かれるようになった。友だちに認められ自信をつけたS男は他の異年齢児との関わりも積極的になり、相手の事を考え、行動できるようになってきた。また、自分達の競技の練習でも諦めず最後まで頑張る姿がみられるようになった。

考察

- ・春から各クラスが自然の中でたくさん経験したことを競技に取り入れ、保育を発展させた事によって、子ども達もイメージしやすく楽しんで取り組めたように思う。
- ・春には地域の人や異年齢児とどう接してよいのかわからなかった子もいたが、いろいろな経験を通し上手く関われるようになった。当日だけでなく、練習の中でも小さい子に対し優しい気持ちが育っているのが伝わってきた。
- ・運動会で自信をつけた子ども達が、小さい子や地域の方に積極的に関わろうとする成長した姿をみることができた。
- ・たくさんの来賓の方や地域の方に来ていただき、改めて地域に支えられながら保育をしている事に気づかされた一日であった。
- ・創意工夫のもと、地域の方との交流から経験したことを競技へと取り入れることができた。

クリスマス会 12月

9月に及川重美さんからいただいた青虫がさなぎになり、観察をしていたがどのように世話をしたらよいのか分からず、クラスの保護者で“岩手虫の会”に所属しているY男の父親に相談し、虫についての話を子ども達にしてもらった。このように、たくさんの感動体験を取り入れ年長児が話し合い、職員がアレンジを加えた『たまごちゃんと虫さんの大ぼうけん』の話が完成した。全園児で行う世界にただ1つだけの全体劇である。

劇は3場面に分かれており5歳児が中心となり進めていく。自分達が自然との関わりや地域との交流の中で経験した事が内容となっているので、楽しんで取り組む事が出来た。

春からの立花先生や重美さんの話を聞く取り組みなどを通して、話す、聞く力が伸びてきており、みんなの前でセリフを言うことも嫌がらずに進めることが出来た。小さいクラスの子達をリードしてあげようとする姿がみられ、そのうち、小さい子達から「お兄ちゃんと一緒にやるんだよ」「お姉ちゃん好き」などという言葉も聞こえてくる。友だちの演じる姿を見て「ちゃんかっこいいね」「声が大きかったね」などと認めるようになった。当日は、今までの練習の成果を十分に発揮し、日頃、お世話になっている地域の方やお家の方の前で堂々と発表することが出来た。

考察

- ・異年齢児との関わりの中で、自分達がリードしなければいけないという気持ち
が育ち練習を進める事ができた。
- ・自分達の場面だけでなく、他の場面も見るようにした事で、見る、聞くという
面も成長を感じる事ができた。
- ・地域の方から「楽しかったよ」「頑張ったね」と褒めていただいたことで、大き
な喜びを味わい、次への意欲につながった。
- ・一年間の様々な経験からクリスマス会の劇になり、職員の資質の向上にもつな
がった。

2月には、お店やごっこがあり1年間の様々な経験を取り入れた『ニコニコ野原
のおみせやごっこ』というテーマで全園児が親子で参加した。3, 4, 5歳児の
異年齢児交流の中で3つのお店に分かれて作った品物を5歳児の親子が売り手にな
り、小さいクラスの親子とやりとりを楽しんだり、体験画・観察画の展示、ク
リスマス会の劇を再現した共同制作の展示等を行った。

実践 新たな地域との出会い

おじいちゃんおばあちゃんの手ってあったかいね <お年寄りとの交流>

15年位前までは園児の送り迎えは半数位は祖父母という時代、現在は172
名中17名ほどであり、核家族が多く、3世代家族は本当に数えるほどである。
保育園では地域のお年寄りと触れあいをもちながら豊かな人間関係の中で、思い
やりとやさしさを育てたいと毎年様々な交流を行っている。そんな中、保育園か
ら歩いて10分ほどの所にある「友愛園デイサービスセンター」から、保育園の
子ども達と交流したいという申し出があった。

最初の交流の時におじいちゃん、おばあちゃんと触れ合う機会が少ない子は手を
差し出されても後ずさりしてしまったり、近寄らなかつたり、どう接して良いの
か分からずに戸惑う姿があり、保育者が間に入っても関われない子の姿が見られ
た。子どもとおじいちゃん、おばあちゃんを上手くつなげられなかったと反省し
帰ってくると「おばあちゃんの手ってあったかいね」「かわいいっていわれたよ」
等と嬉しそうに話をする声に気づき、子ども達にとっておじいちゃん、おばあ
ちゃんのあたたかさにふれ、良い交流の場となった事を感じた。今後も続けていき
たいと思いデイサービスの職員と連絡を取り合いながら交流を進めてきた。

園庭に一足先に咲いた桜の花や、七夕飾りを届けたり、畑で収穫した野菜や焼き
いも、りんご狩りをしてきたことからりんごを届け、喜んでいただいた。また、
施設利用者の方が作ったプレゼントをいただいたり運動会や夏まつりでの鹿踊り
を見に来ていただいたり良い交流の機会となった。交流を繰り返していくうちに、
最初のような姿はみられず、自分たちから近寄っていき声をかけたり、手を握る
姿がみられるようになった。

考察

- ・最初は どう接して良いのかわからない子ども達もおじいちゃん、おばあちゃんからのたくさんの優しさにふれたことで自分達もやさしい気持ちで接することが出来るようになった。また、小さい子に対する優しい気持ちが育ったように思う。
- ・子どもたちの言葉、思いを見逃さずに保育者が気づいた事で子ども達、おじいちゃんおばあちゃんたちにとって良い交流になっていると感じた。職員の気づきの大切さを改めて感じる事ができた。

おばあちゃんのおやつおいしいね <給食担当者と地域とのつながり>

子どもたちの心身の成長発達を促すために保育士だけでなく給食担当者も地域に出かけていき交流をおこなっている。

金ヶ崎町食材 100%給食の日があり、地元の食材を使った給食を年3回行った。また、“地域に伝わる味を伝えたい”“子ども達に味わわせたい”という事で、給食担当者が地域の方に教えていただき毎月、おやつ・おかずに取り入れている。「今日のおやつは おばあちゃんから教えてもらって作ったおやつだよ」と子ども達に話すと「おばあちゃんのおやつおいしいね」と喜んで食べる中で、地域に伝わる味にふれることができた。

また、給食担当者が、各クラスの給食の様子を見たり、保護者からの相談を受けて「三角食べ」「おやつの取りすぎと体の関係について」等、子ども達に話をした。風の子農園で収穫した野菜は、すべて給食で使っている。

考察

- ・保育士だけでなく、給食担当者も地域に出かけていき交流を深める事ができた。
- ・今後も保護者からの声も大切に受け止め、給食担当者と連携をとりながら、よりよい食生活の習慣を養えるように工夫していきたい。
- ・給食担当者が地域の味を取り入れる工夫を行った事で郷土食を子ども達に味わわせる事ができた。

実践 共に歩んできた地域交流

風の子農園 <畑作り>

金ヶ崎保育園から歩いて15分位の所に畑があり昭和45年より毎年、年長組が中心となり様々な野菜作りを行っている。風の子農園は、金ヶ崎保育園の重点保育目標で、開園当初から働く事を通して、子どもの様々な心を育てている。野菜栽培作業は土に親しみ、様々な生き物との共存を知り、畑は生きている事を実感する中で心豊かな子どもの成長に欠かせないものである。その中で、収穫の喜び、食する事への楽しみ、さらに地域の方々の協力を得ながら働く喜びや、食べ物に対する感謝の気持ちを育ててきている。

毎年、種・苗植えから収穫までその都度丁寧に教えていただき、実際に畑で土に

触れながらの触れ合いを通し地域の方と楽しい時間を過ごす事が出来ている。

子ども達は「おじいちゃんに聞けば何でもわかる」と尊敬の眼差しでみており、おじいちゃんおばあちゃんは「子どもから元気をもろう」と喜んでいただいている。収穫した野菜を、年長児が運び地域の方と一緒に洗ったり、焼きいも大会をした時に子どもたちから「おじいちゃん、おばあちゃんにあげたいね」という言葉も聞かれ日頃お世話になっている地域の方に焼きいもを届け感謝の気持ちを伝えた。また、隣のおばあちゃんの畑には冬の間、風の子農園で収穫した大根を入れさせてもらい給食や2月のお店やごっこで使う度に子ども達を取りにいった。

考察

- ・子ども達や保育者にとっても地域の方々に畑作りや、昔ながらの知恵を教えていただき学ぶことが多い。
- ・子ども達から地域の方に感謝の気持ちを伝えたいという言葉が出るようになっており地域交流の中で育っていることを感じた。

子ども鹿踊り < 郷土芸能 >

子ども達に郷土のよりよい文化を伝えていきたいという事で、昭和54年から皆白行山流三ヶ尻鹿踊り保存会の協力、指導の下「子ども鹿踊り」に取り組んでいる。毎年職員が太鼓や踊りの指導を受け、子ども達に踊りを見せて頂きながら踊り続けている。

最初の頃は保育園の運動会だけでの披露で、踊る装束の頭は空き箱で作ったり手作りのもので、その他の衣装も風呂敷等での職員の手作りだったが、何年か続けるうちに卒園児のおじいちゃん達がささらを作ってくれた。保存会の協力で袴や頭も本格的になり、ミルク缶を利用した太鼓は、保存会から立派なものを寄付頂き現在に至っている。

鹿踊りは、小さい時から年長児の太鼓の音や「たいこの～しらべを～」という口唱歌を耳にしている自分達も年長になったら・・・と楽しみにしている取り組みである。真剣に見入る子ども達。「あんな風にかっこよく踊りたい」という気持ちを持ちながら練習に取り組んでいる。

毎年、様々なイベントのオープニングなど地域の行事で披露しており、その度に保存会の方が来て子どもや職員の着付けなどの協力をいただいている。保存会の方が地域のイベント等で踊る時は、職員が応援に行き手伝うなど、交流が続いている。保存会におじいちゃん、お父さんが所属していて、3世代、2世代で踊っている子どももいる。

今回の1月の保育参加日には、保育者の説明のもと、家の方が最初から最後まで着付けを行い鹿踊りの踊り納めを行った。

この活動は、踊りだけでなく地域の方との良いふれあいの場となっている。

「鹿踊りを通して成長したA男」

普段はなかなか活動に集中できず、落ち着きが見られないA男。1つ年上の姉がいる事もあり、鹿踊りは4歳児の時から憧れ真似をしていた。5歳児に進級し、今度は自分の番だと張り切って練習する姿が見られた。登園時A男から「今日鹿踊りする？」と聞かれ「やるよ」と答えた時には「やったあ！！」と喜び、練習を進めていくうちに最後まで頑張る力もついてきた。「A男ちゃんすごいね！！」と保育者に褒められると、自信がつき、踊りもしっかりと踊ることができた。

考察

- ・職員も保存会の方に指導を受けることで、太鼓や踊りの技術が高まり職員の資質向上につながった。
- ・職員と保存会のつながりから子どもたちへとつながり、普段あまり話をしない保護者が、行事の時にいろいろな話をし、保護者同士がつながっている。また、保護者も地域に出向くことで地域とのつながりもできている。

お兄ちゃん・お姉ちゃん大好き <金中保育体験>

約20年ほど前、金ヶ崎中学校の家庭科の先生から「家庭科の授業で保育という単元があり、中学生と保育園児を交流させる保育体験をさせてほしい」という申し出があった。最初は、女子生徒だけであったが、10年位前から男子生徒も来園するようになった。金中2年生、全5クラスが5日間に渡ってくる。子ども達は、中学生が来る日は朝から楽しみにしている。

0歳児ではミルクをあげ、1歳児では小さい手を取り一緒に歩き、大きいクラスでは肩車をしたり、走ったりと全身を使い汗だくになり遊ぶ姿が見られ、楽しい交流の時間を過ごす事が毎回できている。

考察

- ・中学生に優しくされ、たくさん遊んでいくうちに、自分達も小さい子に優しくしようという姿が見られるようになった。
- ・中学生が保育体験の中で保育園児の小さい命としっかり向き合える良い交流の機会となっている。
- ・保育体験を通し保育士という職業に憧れを抱き、実習に来て金ヶ崎保育園の職員となっている人も数名いる。

7. 考察

主題設定の理由の中で述べたように、実践の反省・評価そして改善を進める手法として、当園では、毎年保護者に保育園サービス利用調査、職員に職員アンケート調査を実施している。私たち職員は地域との交流を図りながら保育を進めているつもりであったが、サービス利用調査の中の「行事等を通して、地域住民との交流を図っていますか」という項目で、職員の結果を保護者が下回り、職員の自己満足という結果が表れた。

そこで、何が不足していたか考えたところ、地域交流は3歳以上児が中心となる

事が多いので様子を伝えるために日常の保育の中での地域交流を全保護者に伝えることが不足していたのではなかったか、という反省のもと、全クラスのクラスだよりを廊下に貼り、他のクラスの保護者にも活動を知ってもらい、地域交流の写真をその都度掲示する、各クラスのお知らせボードを利用し知らせるなどの工夫に取り組んだ。

そのことにより、5歳児の親子がスーパーで買い物をしていた時、畑作りでお世話になっている地域の方に会い「あっ、おばちゃんだぁ」と喜んでかけより「こんにちは ちゃん、お母さんと買い物、いっぱい買ってね」などの会話を交わしたとのこと。

その姿を見た母親が、写真で見た方だと気がつき、保育園に通うことで、保育園だけでなく、地域の方皆に守られているのだと感じ、嬉しく思ったというお話を頂き、職員の自己満足に終わらないよう、常に父母との連携を密にし、保育を展開することが強く求められていると改めて感じた。

子どもの昔、今の姿を考えてみると「あそび」も「生活形態」もずいぶん変わってきているように感じられる。歴史的に子どもをあらわす表現がある。明治、大正の子は「働く子ども」昭和初期から30年代は「遊ぶ子ども」昭和40年代「学ぶ子ども」とあり、平成の子どもは「引きこもる子ども」「自信をなくした子ども」と表していた。この事を裏返してみると子どもの姿は親の姿としてとらえても過言ではないと思われる。平成の子は「ひきこもり」実は親の環境状態も「ひきこもり」なのである。

昭和初期から30年代の「あそび子ども」は地域の中で様々な年齢が関わり、自然の中であそぶ姿が見られていたが、平成の子は「ひきこもる子ども」とあり休日でも、公園や家の周りで友達と関わりあそぶ姿はほとんど見られない。大人はとなりに住んでいる人が分からない、会っても声をかけない。

買い物も、昔の 屋さんでは「お肉 300g ちょうだい」「あらおいしそうなアジ 5匹ね」と店の人と言葉を交わす事で人と人の関わりがありコミュニケーションがとれていたが、現在のスーパーでの買い物ではカゴに品物を入れレジを済ませ外に出るまで誰とも言葉を交わすことがなくても買い物が成立する。

地域社会全体の人間関係が希薄になっている。だからこそ、地域社会全体が人と関われる社会にすることが大事と考える。

金ヶ崎町の町長は、金ヶ崎の生涯教育を進める中、3つのキーワードを出した。「地育」「食育」「子育」この3つの課題は町内にある愛護会2園の保育実践の背中を押してくれている。

8. まとめ

地域交流の中で、豊かな心を育てる為、たくさんの方とのふれあいの中、様々な取り組みを行ってきた。その中で欠かせない事は[地域力]であった。それは運動会の時、先頭に立ち、子ども達と一緒に体操やわらべうたあそび等で交流してくれた、金ヶ崎町長さん、議会議員さん、民生委員さん、地区センター所長さんはもちろん

の事、もっと私達の身近に住んでいる地域の事を一番よく知っている普通のおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん（ソーシャルアンクル・ソーシャルアセント）が子育て応援者になり、子ども達にたくさんの事を教えてくれた。それは「身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感をもつ」という指針に記されている事にもつながっており、保育士の創意工夫や質の高い保育につながり大きな力となった。

そして私達保育士が小さな事への[気づき]の心を大切にしながら、人と関われる社会、人と関われる人間、子どもを育てる為、地域と共に歩んでいく事が私達の役割であり、今後も進めていきたいと考える。これからの保育園の役割は“つなぐ”という事がキーワードであると考えている。子どもと子どもをつなぐ、親同士をつなぐ、親と子どもをつなぐ、子どもと親と地域をつなぐなど、保育園の役割になるのではないか。「地域と共に豊かな心を育てる保育」に取り組む事で地域から信頼される保育園でありたいと考える。